

---

# スイートプリキュア&仮面ライダーキバ&W 心の音楽とそれとの想いと覚悟

TH

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

スイートプリキュア&仮面ライダーキバ&W 心の音楽とそれぞれの想いと覚悟

### 【Zコード】

N3112Z

### 【作者名】

TH

### 【あらすじ】

音楽の街。加音町。この町にプリキュア達とは違う覚悟を持つている者たちがいた。一人は運命の鎖を解き放ち、愛する少女と音楽と親愛なる友のために戦う者。一人は心から大切な少女を守るために友と共に運命に挑む者。一人は故郷と友を裏切ってしまい死んでも償えない罪を持つ者。一人はある少女の父親を救うため、ある男の復讐するために戦い続ける者。その想いが一つになる時、彼らは仮面ライダーとして覚醒する！

スイートプリキュアと仮面ライダーキバ、Wのコラボです。ちなみに  
にイクサとサガは出ません。イクサとサガが好きなみなさんはいま  
せん…

## プロローグ

「まてーーー！」

「逃がさんぞーーー！」

とある世界。そこには怪物たちが何かを追っていた。追っていたのは2匹のコウモリだった。彼らの名は『キバット2世』と『キバット3世』だった。

「へへー！父ちゃん そばにいるーーー！」のまほじやあこつ等に捕まるかーーー？

「…………いつなつたら別れよー。しばりへ会えねえかもしだねえ。それでもお前は『アレ』持つのこぶさわしい奴を探せーーそしてあいつ等と戦うんだーー！」

「じゃあ、父ちゃんそばにいるんだよー！」

「オレも逃げるぜーーーそしてまたお前の所に行くーーー！」

「わかつたぜーーーだけど絶対に戻つてこよーーー！」

「ああーーーしばしの別れだーーー我が息子よーーー！」

「ああーーー父ちゃんも死ぬんじゃねえぞーーー！」

「いたぞーーーうちだーーー！」

2匹は一歩に分かれた。怪物たちも別れたコウモリを追いかけた。

## 第1話 いつもの日々

加音町のとある住宅街。そこにある一軒家に一人の少年が住んでいた。彼の名は『仲村春樹』。聖アリア学園2年生である。

「いつきまーす」

春樹が玄関に出ると玄関の前に一人の少年がいた。彼は『立花勇一』。春樹と同じくアリア学園中等部2年である。

「おはよう。春樹」

「オス！ 勇一！」

春樹と勇一は幼稚園のころからの幼馴染であり、かなりのなかよしである。学園ではかなりの有名である。2人は会話をしながら登校するが校門に着くと突然春樹はダレ始めた。

「春樹どうしたの？」

「あ～もう着いちゃったよ～…嫌だ～行きたくない～…」

「なんで嫌なの？」

「勉強が嫌なんだよ～…」

そんな春樹を見て呆れる勇一。しかしそんな春樹を唯一やる気を出させる方法があった。

「……響に会いたくないの？」

勇一の言葉を聞いた春樹はさつきとは別人のように立ち直った。

「よつしゃ！ 行こうぜ！」

「単純な奴…」

春樹と勇一は校舎に入ると春樹は2人の女子生徒に気付いた。

「お！ 噂をすれば！ 勇一！ いつものやるからお前もやれ！」

「いいよ僕は」

「いいから！」

春樹は強引に勇一を引っ張り静かに2人の女子生徒に近づき、2人の女子生徒に目を隠した。

「だーれだ？」

「「キヤー！」」

女子生徒は見事に驚き小さい悲鳴を出した。この一人は春樹と勇二の幼馴染の『北条響』、もう一人は『南野奏』だ。

「もう春樹！いつもそれはやめてつてば！ビックリするんだから…」「勇二も何で止めないの！」

「僕はいつも止めているよ。春樹が強引にやらせるんだよ」「全くいい加減慣れろよ～。やるの俺だけなんだからさ」「これが春樹と勇二の日常だった。

「そう言えば勇二。お前今日日直じゃあねえの？」

「あ、そうだった。って君が強引にまあいや。じゃあ僕、さきに教室にいくね」

勇二は3人に言い残し教室へと向かった。

「じゃあ俺達も行こうぜ」

「あ、こら春樹待つてよ！」

「待つて2人ともー！」

春樹達も教室へとむかつた。そんな所を見ていた怪物が見ていた。

「ここか…ここに『キバット』が…」

そして春樹は気付いていなかつた。彼はもうすでに運命の戦いに巻き込まれたことを

## 第2話 謎の怪人達と変身

加音町の調べの館前。そこにコウモリがいた。

「こゝか…ここに『鎧』にふさわしい奴がいんのか?ん?」

キバット3世はある老人がいるのを気付いた。音吉だつた。

「音吉…?音吉じやねえか!!」

「ん?お~キバットではないか」

「久しぶりだな~。元気だつたか?」

「ああ、ここの通り元気にしておるよ。ところでもまたなぜここの世界に

?」

「それがよ…あいつ等が封印から目覚めてしまつて…だから『鎧』の所有者の子孫を探してんだよ。」

「そつか…奴らがまた…しかしその者は自分を知つたら苦惱するはずだうう…あれば『ファンガイア』の血を持つ者でなければならんかな」

調べの館から過ぎてアリア学園の教室ではいつもの授業。春樹は退屈そうにしていた。

「あ~…暇だ…」

「春樹。授業ぐらいちやんとしなよ」

「オレは体育以外はやる氣で無いんだよ…」

「音楽だけはシャキつてするのに?」

「音楽は別だよ。だつて加音町の住人だし」

「将来有望なヴァイオリニストだもんね」

「別に。俺はそんなにつまくないし」

春樹と勇一は先生が黒板を後ろを向いている隙に会話をしていたその時だつた。

ジリリリリリリリリ!

突然警報が鳴り生徒達は驚いた。

「な、なに!」

「なんだ！？」

生徒達は慌て始め、混乱状態になつた。すると突然教室の外側の窓がバリーンと割り、外から怪物が入つて來た。怪物を見た生徒達は一目さんへと逃げ始めた。

「何だあれ！？」

「どこだ？『キバの子孫』はどこにいるんだ！？」

「キバ…？」

「おい小僧！『キバの子孫』は何処だ？」

「何だよいきなり現われてキバとかなんだかわけのわからんねえこと言いやがつて、そう言うお前等は誰なんだよ！？」

「我らはファンガイア！人間を超えている存在さ！」

「ファンガイア？ハツ！何が人間を超えた存在だ。ただの弱い者いじめじやねえか！！」

「フン！人間風情でありながら威勢だけはいいな。ここにいた人間はお前以外逃げたし、お前の『ライフエナジー』をいただくぞ！」

ファンガイア達は一斉に襲いかかつて来たその時だった。

「――プリキュア！トリプルハー モニー キック！」

「ぐわ！」

突然ファンガイアの横に少女の3人がキックを放つた。キックしたのはマゼンタ色の衣装の少女と白の衣装の少女、そして青の衣装の少女だつた。

ファンガイアは壁にたたきつけられて怒りの声を上げながら…。

「おのれ！何者だ貴様ら！」

「爪びくは荒ぶる調べ！キュアメロディ！」

「爪びくはおらかな調べ！キュアリズム！」

「爪びくは魂の調べ！キュアビート！」

「――届け！3人の組曲！スイートプリキュア！」

「プリキュアだと！？」

ファンガイア達は驚きながらプリキュア達を見ていた

（あれ…驚いてるのか？）

「そう！！私達はこの町を守る戦士！！プリキュアよ～～！」

「これ以上人は襲わせないわ！！」

「無関係な人々を襲つた事…覚悟しなさい…」

3人はファンガイアを睨んで言つ。

(あれつて…最近この町に現われる怪物と戦つている『プリキュア』だ！すげえ、生で見た！！)

春樹は目の前にいるプリキュアを見て少し驚いていた。

「大丈夫！？」

「あ、ああ。大丈夫だぜ」

「ここ私達に任せて、あなたは早く逃げて！」

「逃げるつて、でもお前ら！」

「いいから早く！」

春樹は悔やんだ表情をしながらメロディ達と言つとおりに教室から出たが、春樹は校舎に出ず、廊下に隠れながら見ていた。

「逃げろって言われてもな…」

春樹はメロディ達に見つからないように教室を覗くとメロディ達はファンガイアをおびき寄せて校舎に出た。

「あいつら、マジであんな奴らを倒すのかよ…ちょっと心配だぜ…」

春樹はメロディ達の所をへ向かうため行内に出た。校庭に着くとメロディ達はファンガイア達と戦つっていた。

「――ハアアアア！」

「――うおおおおお！」

「すげえ…あんなのテレビでしか見ないのに…でもなんかプリキュアの方、苦戦してるみたいだけ…」

春樹の言つとおり、プリキュア達は少し苦戦していた。

「なんなのあいつら、トリオ・ザ・マイナーより強いよ…」

「あなた達は何者なの？トリオ・ザ・マイナーの仲間なの？」

「フン！我々を下等な奴らと一緒にするな！我々は『ファンガイア』だ！」

「ファンガイア？」

ビート以外は困惑する。

ビート「ファンガイア…まさか…！」

ビートは相手の正体を知つて驚く…どうやら彼女はファンガイアを知つているらしい。

「ビート、知つてるの？」

2人がビートに聞きビートがうなずいて手短に説明する。

「ファンガイア…人々が持つてゐるエネルギー、『ライフエナジー』奪う魔物よ。でもファンガイアは『キバ』に封印されたはずなのに…いつたいどうやつて…！」

少し動搖しながらビートは言つ。

ファンガイアも少し驚きながらも冷静に言つ

「ほお。貴様。我々や『キバ』のことは知つてゐるのか。だつたら話は早いな。『キバット』達はどこにいる…奴には封印された恨みがあるんでな…！」

突然凄みのある声で叫ぶ…！

メロディ「なにいつてるの？キバットって？」

ビート「キバに変身させる力を持つてゐるコウモリ型のモンスターの事よ。でも、キバはもういなはすだわ…あの戦いの後彼らは行方不明になつて…」

コレを聞いたファンガイアは？

「そうか。キバはいなか。フフフ…これはまた好都合だな。奴がいたらライフエナジーを奪えなくなるからな…！」

そのファンガイア達は残忍な笑みを浮かべる…！

ファンガイア「だがまずは…邪魔なお前達だ…！」

そう言つと1体のファンガイアがメロディに襲い掛かつて來た…！

「そんな事はさせない…！ハアアアア…！！！」

メロディはファンガイアにパンチで反撃するがファンガイアはそれを受け止めた。

「フン…！人間風情の小娘が…！意気上がるなあああ…！！！」

ファンガイアは空いていた左手の鋭い爪でメロディを引っ搔いて吹

き飛ばす！

メロディ「きやああああ！」

「メロディ！」

「よそ見している場合か？」

リズムとビートは後ろを向くと他のファンガイアが既に後ろに立つていて、2人を攻撃した。

「きやああああ！」

「あ…あいつ等…」

春樹はやられている3人を見てそれを何度も容赦なく攻撃しているファンガイアに怒りが込み上げ始めた。とうとう我慢が限界になつた春樹は立ち上がった。

「おいお前ら！いい加減にしやがれ！」

春樹の大声でファンガイア達は気付き、春樹の方へ向いた。

「ん？貴様はさつきの人間…ほほう、わざわざ死ににきたのか」

「ああ！（あいつなんで逃げなかつたのよ！…）」

メロディは春樹を逃げすため立とうとしたが、怪我の激痛で立てなかつた。

「うう！」

「お前ら、女の子を痛めつけて恥ずかしくないのか！？」

「フン、我々を人間と一緒にするな。我々は人間だつたらたとえ女だろうが子供だろうが容赦は一切しない！」

ファンガイアの言葉で完全に怒つた春樹は落ちてあつたバットを拾つた。

「お彼らの相手は俺がしてやるぜ！」

「はははは！人間が我々に相手するだと？だつたら望みどり、

お前のライフエナジーを奪つてやる！」

ファンガイア達は春樹のライフエナジーを奪おうと一斉に襲いかつて來た。春樹はバットで殴るが、ファンガイアはそれを片手で止めた。

「うそ！？」

「言つただろ？貴様！」ときが我々に敵わないと。さあ、貴様のライフエナジーをもらつぞ」

ファンガイアは春樹の首を左手で絞めた。ファンガイアは春樹の首筋に近づいたその時だった。

キュアアアアアア！

突然春樹から強い光が走った。ファンガイアは驚き、春樹を放した。

「な、なんだ！？この光は！？」

「なんなのいつたい！？」

「！あの紋章は！？」

ファンガイアは光っている春樹の胸に大きな紋章があつた。コウモリの模様にしている紋章だつた。

「な、何だこれ？」

「それはキバの印だぜ！」

上から声が聞こえ春樹は上を見た。そこにはなんと「ウモリが飛んでいた。

「何だお前！？」

「貴様は！」

「俺様はキバツト三世だ！よろくな！！キバのの子孫！」

「キバの子孫？」

「お前のその紋章はキバの鎧の所有者の血縁者の印だ！俺はお前を探してたんだ！」

「俺を探してた？どういう意味だよ？」

「ああー話しさは後だ！まずは変身しろ…」

「変身つてどうやつて？」

「お前のその光でベルト出すんだ！」

「だからどうやってやるんだよ！」

「その光に手で触つてみろ」

春樹はコウモリの言うとおりに光を触ると光はまた強く光り、春樹の腰に集まつた。すると春樹の腰に赤いベルトが現れた。

「な、何だこのベルト？」

「それは俺の止まり木もある『キバットベルト』だ。後はお前の腕を俺に噛ませて『魔皇力』を注入させれば変身できるぜー。そうすればお前はあいつ等に勝てるぜー！」

春樹は最初は自分のベルトを見て、次はファンガイア、そして最後は倒れているメロディイ達を見た。

「おい。コウモリ！」

「俺はコウモリじゃねえ！キバット三世だ！」

「わかった。キバット。変身したら本当にあいつ等に勝てるのか？」「ああ！もちろんだ！キバの鎧を信じろ！」

「……わかった。行くぜキバット！」

「よっしゃ！キバッていぐぜ！」

春樹はキバットを掴み、自分の腕をキバットに噛ませた。

「ガブツ！」

キバットが噛むと、春樹の頬にステンドガラスの絵みたいな模様が現れた。

「変身！」

春樹はキバットにベルトに装填すると春樹の姿はコウモリに酷似した姿へと変わった。春樹はキバの鎧に纏つた戦士・『仮面ライダー キバ』に変身した。

### 第3話 戦闘開始！キバVSファンガイア

『仮面ライダー キバ』に変身した春樹は自分の姿を見た、プリキュアとファンバイア達は驚いていた。

「春樹が…」

「変身した…」

「あれがキバ…名前だけは聞いたことがあるけど、見るのは初めてだわ…」

「あの男…キバの鎧使える奴だったのか！？」

「く…先に始末するべきだつた…」

「これが…キバの鎧…」

「おお。こいつがキバの鎧さ…それじゃあ春樹、準備はいいな？」

「ああ！いつでも良いぜ！」

「おのれ…キバめ…ここで死なせてやる！」

ファンガイア達はキバを倒そうと襲いかかって来た。

「よつ、と。オラ！」

キバは軽々くかわし、一体のファンバイアにキックした。ファンガイアはそのまま他のファンガイアまで飛んで行つた。

「ぐわあ！」

「へつ、どうだ！」

「ぬう…やはりキバは手強い…」

「だが、やつはまだキバの力を慣れていない。奴を回りこむんだ！」

ファンガイア達はジャンプしキバの周りに囲んだ。

「おいおい、流石にこれはな～」

「春樹！ベルトに付いている青のフェッスルを俺に吹かせるんだ！」

「青のフェッスル？これか？」

キバはベルトに付いている青のフェッスルをキバットに吹かせた。

「ガルルセイバー！」

キバットが青のフェッスルを鳴らすと、キバとキバットの眼の色と

胸が青に変わり、『魔獣剣ガルルセイバー』が現れた。そして左肩には青い毛が立つた外見になつた。キバの姿は『キバフォーム』から『ガルルフォーム』へと変化したのだ。

「おお！ すげえ！ 剣が出てきた！」

「感心してる場合か！ それで奴らを斬るんだ！」

「ああ、わかつた！」

キバは素早いスピードでファンガイアの後ろに着き、ガルルセイバーで斬つた。

「ぐわあ！」

「え！ ？ いまどうなつたの！ ？ 全く見えなかつた！ ？」

キバのスピードを見てメロディ達はかなり驚いていた。しかしそれはキバ本人も驚いていた。

「い、今のはなんだ？」

「これが『ガルルフォーム』の力だ。ガルルフォームはキック力、走力といった脚力が優れるんだ」

「すげえ！ キバの鎧つて！」

「だから言つただろ？ キバの鎧は強いつて」

「よーし！ この調子でいくぜ！」

キバ＝春樹はガルルセイバーを構え、再びファンガイア達と戦い始めた。キバ達がいる校庭に離れ、学校の屋上で黒いマントと仮面をつけているプリキュア『キュアミューーズ』がキバとファンガイアの戦いを見ていた。

「あれは… キバとファンガイアだドドー！ なんでこの世界にいるドドー？」

キバの姿を見ているドドリーは驚きを隠せなかつた。しかしミューーズは黙つてキバの戦いを見ていた。

「よし！ 春樹！！ ガルルセイバーを俺に噛ませるんだ！ 『ガルル・ハウリングスラッシュ』だ！！」

「OK！」

キバはガルルセイバーをキバットに噛ませた。するとキバ達の周囲

に満月が浮かぶ夜になった。

「あれ！？夜になつた！」

「まだ昼なのに！！」

「決めるぜ！ガルルバイト！」

「喰らえ！ガルル・ハウリングセイバー！！！」

キバはガルルセイバーを口に加え走りだし、必殺技・『ガルル・ハウリングスラッシュ』を炸裂し2体のファンガイアを斬つた。一刀両断すると2体のファンガイアにオオカミのような紋章が現れ、爆破した。

「す、すごい！」

「私達が全く敵わなかつたファンガイアに…」

「あれが…キバの鎧…」

キバは最後の1体のファンガイアを見て、キバットに言った。

「ねえ、キバット。こいつには最初の姿の奴で倒していい？」

「ん？なんでだ？」

「さつきの奴らにはもう倒しちゃつたけどよ、あいつはあのキュアメロディやリズム、そしてビートにひどいことをしまくつたから、あいつ等の分は俺がやる。いいだろ？」

「わかつたぜ」

キバットはそう言つとキバはガルルフォームからキバフォームに戻つた。

「さあ。掛かつて来な！あいつ等の仇だ！」

「フン！2体を倒したからつて言い気になるな！」

2人は走り出し、キバとファンガイアの格闘戦が始まった。

「はあああああ！」

「くつ！キバになつたばかりなのにこれほど強いとは…」

ファンガイアは右手に爪を出し、キバに引っ搔こうとしたがキバはそれを右手で掴んだ。

「何！？」

「これは…キュアリズムの分だ！」

キバは掴んでいない左手で殴った。ファンガイアはその衝撃で後ずさつた。

「ぐわあ！」

「これはキュアビートのだ！」

キバはそれを見逃さず、蹴りを入れた。

「そしてこれが」

「春樹！ 最後は『ダークネスマーンブレイク』で決めるぞー！ 赤いフェッスルを吹かせるんだ！！」

「いきなり声掛けるな！ まあ、やるけどよ」

キバはベルトに附いた、赤いフェッスルを出し、キバットに吹かせた。

「ウェイクアーップ！！」

キバットがウェイクアーップフェッスルを鳴らすと、今度は周囲が三日月が浮かぶ夜空になった。その同時にキバの右足に拘束していた鎖が開放した。

「また夜になつた！」

「どうなつてゐのー？」

「よし！ キバッて行くぜ！ 春樹！」

「おお！ 行くぜ、これがキュアメロディの分だ！ 『ダークネスマーンブレイク』！！」

キバは上空にジャンプし、キバフォームの必殺技・『ダークネスマーンブレイク』を炸裂した。キックすると今度はキバの紋章が現れ、爆破した。

「ぐわあああああ！」

ファンガイアを倒した、キバは変身を解き、春樹に戻った。

「ふうー。結構ヤバかつたな…」

「よくやつたぜ春樹！ 流石だぜ！」

「お前が支持してくれたおかげだよ」

「いいや。お前の実力だぜ！」

「へへ、照れるな。あ、そうだ！」

春樹はファンガイアにやられていたメロディ達の所へむかった。

「お前ら大丈夫か？」

「うん…大丈夫だよ」

「助けてくれてありがとう」

「まさか、キバに会えるなんて思わなかつたわ」

「え？ お前、キバのこと知つてるのか？」

「え、ええ。大体ね」

「へえ… そうだ、お前大丈夫か！？ さつきの奴に引っ搔かれたけど」「え？ だ、大丈夫だよ！ この通り！」

春樹はメロディが引っ搔かれた所を見た。見た感じ傷は深くなかつた。運良くかわしたのだろう。

「そうか… こっちも助けてくれてサンキューな」

「ううん、助けるのは当たり前だよ！」

（なんかこの3人… 親しみやすいな… あ、あれ？ 周りが…）

春樹は急に視界が見えなくなり、倒れた。原因是キバットが春樹を噛み、眠らせたのだ。

「は、春樹！ ちょっとアンタ！ 春樹に何したの！？」

「大丈夫だ、少し眠らせただけだ。お前等は確かプリキュアだつたよな？ 正体をバラしたらマズいだろ？」

「え？ あ、うん」

「あなたプリキュアのこと知つてるの？」

「ああ。でも今は詳しく述べねえ。だがいづれ話すからよ」

それからじばらぐ氣を失っていた春樹は保健室で寝ていたのは別  
話。

## 第4話 勇一の覚悟！闇のキバ参上！（前書き）

今年最後の投稿です！最後の部分だけ、2話と似ているかもしれません…

## 第4話 勇一の覚悟！闇のキバ参上！

翌日

響達は調べの館で集まっていた。エレンが昨日春樹が変身したキバの事について説明をするためだ。

「それでエレン。キバってなんなの？」

「キバはその昔、ファンガイアがメイジヤーランドに襲われていたことがあったの。その時にキバがメイジヤーランドに現われたの。キバは音楽を心から愛してた人だったわ。」

「音楽を愛してた……（確かにあいつもそうだったね）」

「でも、どうして春樹がキバになつたのかな？もしかして昨日春樹から光つたあれが関係してるのかな？」

「あの時現れたキバットが言つてたでしょ？「あれがキバの鎧の所有者の血縁者の印だ」っておそらく春樹君は昔のキバの子孫なんだわ！でも少し変だわ……」

「なにが？」

「私が聞いた話しだとメイジヤーランドに現われたキバは2人だったはずなのに昨日は1人だったわ。でももう一人のキバはいつたい……」

「それは『ダークキバ』です。」

突然何処からか声が聞こえ声の所へ向いた。そこに宝箱が光り、開いた。これは響達がフェアリートーンを助けるために魔響の森の試練を乗り越え、手に入れたアイテム・『ヒーリングチエスト』だ。そしてその中から声の主は、フェアリートーンの生みの親、『クレッションドローン』だ。

「クレッションドローン、何か知ってるんですか？」

「はい。かつてメイジヤーランドの危機を救ったキバともう一人のキバは『ダークキバ』という戦士です。彼も音楽を心から愛している人でした。しかし、ファンガイアの封印が解いてしまうなんて……」

響、奏、エレン。あなた達は昨日、キバと会つたそうですね。誰だつたんですか？」

「はい、仲村春樹って名前で私の幼馴染です。」

「そうですか… 3人とも、ファンガイアはまた現われます。その時は彼と協力して下さい。」

「「「はい！」」

3人は春樹を助けるといつ覚悟を決め、頷いたその時だった。

「おーい！響、奏！」

突然の大きな声で響は危うくヒーリングチエストを落とすところだつた。響達は素早くヒーリングチエストを隠した。

「は、は、は、春樹！驚かさないでよーーー！」

「別に驚かそうとは思つてねえよ」

「いきなり声を掛けてくるからでしょーーー！」

春樹は何で自分が怒られるんだつと疑問を思いながら響達を見ていた。

「そう言えばお前らなんか大事そこに持つてたよな？何持つてるんだ？」

「あ、えっと…これは…」

「オ、オルゴールなのーー！」

「ふうん。まあいいや。」

春樹は興味ないのか話しを止めた。すると春樹はエレンと田口令智つた。

「あ、お前は確か転校生の 黒川、だつたよな？」

「ええ、黒川エレンよ。」

「そうか、じゃあさ、お前の事エレンって呼んでいいか？」

「ええ、いいわよ」

「そつか。じゃあよろしくなエレン」

「ところで春樹何しに來たの？」

「え？ああ、暇だから調べの館に行こうかなつと思つてな。ちよつとここでヴァイオリンを弾こうと思つて」

「えつー！ヴァイオリン弾くのー？やつてやつてー！」

春樹がヴァイオリンを弾くと聞いた響は急にテンションが高くなつた。

「どうしたの響？」

「響は小さい時から春樹のヴァイオリンが好きなの。春樹はああ見えて、ヴァイオリンすごく上手いの」

「へえ、私も聞きたい！いいよね？」

「おお、いいぞ」

春樹はヴァイオリンケースからヴァイオリンと楽譜を出した。

「じゃあ、いくぜ？」

春樹は椅子に座り、ヴァイオリンを弾き始めた。ヴァイオリンからとてもきれいな音色が鳴り響いた。響と奏ではとても嬉しそうに聞いていた。エレンは驚いた表情で春樹を見ていた。

「すごく上手…」

「春樹のヴァイオリンを聞くとなんだか落ち着くんだよね」

「ホントだよね…」

しかし春樹は途中ヴァイオリンを弾くのを止めた。

「どうしたの春樹？」

「……なんか変」

「え？ なにが？」

「音色が」

「え？」

春樹はもう一度ヴァイオリンを弾こうとした。するとヴァイオリンが勝手に音色が鳴り響いた。

「な、何だこれ！？」

「ええ！？ヴァイオリンが

「勝手に弾いてる！？」

「ま、まさか…幽霊！？」

響と奏は怖くなり春樹から離れ、エレンはその2人の後に隠れた。

「何がどうなつてるんだよ！？」

「おい、春樹！」

突然声を掛けられ春樹は調べの館の入り口を見た。そこにキバットがいた。

「キバット！！今手が離せないんだよ！」

「そんなこと言つている暇はねえんだよ！！ファンガイアがまた現われたんだ！！」

「ええ！？こんな時に！？」つちヴァイオリンが勝手に音が立つているのに！！」

「！お前、そのヴァイオリンは『ブラッディ・ローズ』じゃねえか！？なんでお前持ってるんだ！」

「『ブラッディ・ローズ』？何それ？」

「ファンガイアを察知するためのもんだ！いいから早く行くぞ！」

春樹は急いでヴァイオリンをケースに入れ、キバットの所へ向かった。

「キバット！何だよ『ブラッディ・ローズ』って？」

「説明は後回しだ！」

春樹とキバットは現場に着くとそこにはスパイダーファンガイアがいた。春樹は立ち止まるとすぐそこに勇一がファンガイアに襲われる寸前だった。

「勇一！お前ら勇一から離れる！」

春樹はファンガイアの一人に蹴りを入れファンガイアは倒れた。

「勇一、大丈夫か！？」

「春樹！何か分かんないけどあいつらやばいよ！逃げよう！」

「そんなこと言つてられるか！キバット！」

「よつしやキバッていくぜ！ガブツ！」

「変身！」

春樹はキバに変身し、スパイダーファンガイアと戦い始めた。

「春樹が…変身した…」

「お前ら、俺のダチに手を出した罪はデカいぜ！覚悟しな！」

「春樹！今日は緑のフエッスルで行くぞ！」

「ああ！」

キバは縁のフエッスルをキバットに吹かせた。

「バッシャーマグナム！」

キバットがフェッスルを吹くとキバの鎧が縁になり、右腕が半漁人の魚になり、右手に魔海銃バッシャーマグナムが現れた。キバは『バッシャーフォーム』になつた。

「行くぜ！」

キバは『バッシャーマグナム』を連射した。「春樹…」

勇二は闘っている春樹を見て、自分も春樹と一緒に闘いたい気持ちが溢れた。しかし今の自分は何もできない。己の無力さを悔やんだ。その時だつた。

勇二の胸にキバの紋章が現れた。それを見た春樹とファンガイアは驚いた。

「あれは、キバの紋章！」

「な、なんだこれ！」

「やはりお前だつたか。」

勇二は上を見るとそこにキバットに似た黒いコウモリが現われた。

「ああ！父ちゃん！！」

「ええ！？お前、父ちゃん！？」

「久しぶりだな息子よ。鎧の所有者を見つけたのか。」

「君は？」

「そうだ。紹介してないな。俺は『キバット2世』だ。よろしくな。

『闇のキバの子孫』よ

『闇のキバ？』

「そうだ。お前は奴と同じ、キバの鎧を持つ者だ。俺がお前に力を与えよう。ありがたく思え。」

キバット？世の態度を見た春樹は少しムッとしていた。

「なんだい？？偉そうに」

「父ちゃんはああなんだ。でも嫌な奴じやないから大丈夫だ」

「お前名前は？」

「え？ 立花勇一だよ」

「そうか。勇一。いまから俺の言つとおりにやるんだ。そつすればお前はダークキバに覚醒する。覚悟はいいか？」

勇一はキバット2世の言葉を聞き、春樹を見た。春樹は黙つて頷いた。

「あるよ。僕は春樹を助ける。」

「よし、分かつた。ではまず、その紋章に手を触れてみる。」

勇一はキバット2世の言つとおりに紋章を触った。すると勇一の腹部に黒いベルトが現われた。

「これは…？」

「それは『ダークキバットベルト』だ。さあ俺を噛ませろ。『噛むつてどうやって？』

「簡単だ。お前の手を俺に噛ませるんだ。『魔皇力』を注入させればお前は変身できる。」

「わかった。じゃあ、行くよ！ キバット！ ！」

「おお！」

勇一はキバット2世に自分の腕を噛ませた。すると勇一の頬に春樹と同じ、ステンドグラスの絵のような模様が現れた。

「変身！」

勇一はキバット2世にベルトを装着すると勇一の全身に黒いキバの鎧が装着した。勇一は闇のキバ・『仮面ライダーダークキバ』に変身した。

## 第4話 勇一の覚悟ー闇のキバ参上ー（後書き）

読んでいただいた皆さんー今年は忙いもありがとうございましたー！  
よい年をー！

## 登場人物（前書き）

今日は登場人物紹介です！！

## 登場人物

本作キャラクター

仲村春樹／仮面ライダー・キバ

本作の主人公。アリア学園中等部2年。ファンガイアに襲われているところをキバット3世に会う。己の運命を解き放つことでファンガイアとマイナーランドとの闘いに挑む。正義感が強く、かなりの負けず嫌いで人情に厚い性格。しかしその反面、音楽を心から愛していて、ヴァイオリンの腕はとても良く団や王子、音吉にも一目置かれている。響に一方的に好意を持っている。響や大切な仲間や音楽を守るために仮面ライダー・キバとして闘う。

立花勇一／仮面ライダーダークキバ

春樹の幼馴染。アリア学園中等部2年でスイート部所属。春樹の良き理解者ファンガイアと戦っている所を見て、春樹を助けたい覚悟を決めたところをキバット2世と会う。眞面目で礼儀正しくやさしい性格。チャームポイントはメガネ。ケーキ作りはとてもよく先輩たちにも認められている。奏に密かに異性的に好意を持つているが、奏が王子のことが好きなのを知っているため気持ちを隠している。本人曰く「奏の笑顔でいてくれればそれでいい」。奏や音楽を守るために仮面ライダーダークキバとして戦う。

キバット3世

春樹の相棒。春樹に色々サポートをする。性格は本家仮面ライダー・キバと同じ。

キバット2世

勇一の相棒。勇一が悩んでいるときにいつも相談してくれる頼れる仲間。性格は本家と同じである。

原作キャラクター

北条響／キュアメロディ

キュアメロディに変身するアリア学園中等部2年。春樹と勇一の幼馴染。性格とかは原作同様。春樹と勇一と共に闘う。勇一と同様春樹の理解者。本作設定ではあまり表に出していないが春樹に好意を持っている。

南野奏／キュアリズム

キュアリズムに変身するアリア学園中等部2年。春樹と勇一の幼馴染。原作と同じ設定。春樹と勇一と共に闘う。王子に好意を持つているのは原作と同じだが、いつも無理してしまつ勇一に気にかける一面も。

黒川エレン／セイレン／キュアビート

キュアビートに変身するアリア学園中等部2年。原作と同じである。3人の中でキバやファンガイアのことを知っている。

## 登場人物（後書き）

こんな感じです。

第5話 ネガトーン現る！？そして最強のチームワーク！（前編）

キバとダークキバと共に闘します！！

## 第5話 ネガトーン現る！？そして最強のチームワーク！－

「これが……闇のキバの鎧……」

「貴様、何者だ！」

「ダークキバだよ。よろしく」

「勇一。」

「ん？ 春樹か。これなら君と一緒に戦えるね」

「ああ、一緒に闘おうぜ！」

「うん！」

同じ頃、響達は勇一が変身したところを見ていた。

「勇一が変身した！？」

「あれがダークキバ？」

「なんか…吸血鬼見たい…」

「ん？」

響達がいるのを気付いたのかキバは響達の方に向いた。

「響！？それに奏にエレン！？お前ら危ないから引っ込んでろ！」

「大丈夫。私たちも闘うから」

響はそう言うと3人はハート形のコンパクトを出した。

「え？」

「ん？あれどこかで見たような…」

「――レツツップレイ！プリキュア・モジュレー・ション！――」

3人は叫ぶと3人の姿が変わった。3人の姿を見た春樹は驚いた。

「ええ！？あれって昨日の！？」

「爪びくは荒ぶる調べ！キュアメロディ！」

「爪びくはおらかな調べ！キュアリズム！」

「爪びくは魂の調べ！キュアビート！」

「――届け！3人の組曲！スイートプリキュア！――」

「嘘…奏達がプリキュア…」

勇一は驚きながら3人を見ていた。一方の春樹はアタフタしていた。

(「おいおい！あの時俺を助けたのが響達だつたのかよ！？それじゃあ、俺あいつの前でカッコイイこと言つちまつたじやん！…あ、でも響達だつたからあんなに親しみやすかつたのか）

「春樹、なにブツブツ言つてるの？」

「うわ！？」

突然メロディに声を掛けられ春樹はビックリした。

「お、お前！いきなり声掛けるなよ！」

「アンタがブツブツ言うからでしょ！」

「2人とも話しさ後だよ。ここはみんなの力を合わせよう」

「え？」

「正義の味方同士助け合う。それが一番だろ？」

「うん！勇一に言つとおりだよ！」

「さすが！」

「おーいもういいか？」

キバ達はスパイダーファンガイアの方を向いた。そこにはスパイダーファンガイアが寝そべりながら5人を見ていた。

「おつと悪いな。よーしいくぜ！」

5人は戦闘態勢に入つたその時だつた。

「ガハハハハハハ！」

突然の大笑いで5人はずつこけた。

「今度は何だよ！」

「今の声はもしかして！」

5人はスパイダーファンガイアの後ろを見た。そこには3人の男がいた。

「何だあいつら？」

「俺様達はトリオ・ザ・マイナーだ！俺様達目的は

「だつてさ」

「ダッセー名前」

「何だと貴様等！俺様を誰だと思つている！？」

「単なる」

「つるさい人」

「つらせーおっさん」

「おのれー！俺様をバカにしゃがってーん？」

大柄の髭の男はスパイダーファンガイアの背中に音符がくっついているのを気付いた。

「フフ、音符を見つけたぞー出でよ！ネガトーン！」

男は叫ぶとスパイダーファンガイアは突然巨大な怪物に変わってしまった。

「何だあれ！？」

「あの怪物…まさか、最近この町に出る怪物はあいつ等が操つていたのか！？」

「だつたら、話しは簡単だ！倒すまでだ！」

「そうだね！行くよ皆！」

5人は一斉にファンガイアネガトーンへと走った。

「フン！さつきのガキ！仕返しをしてやる！ネガトーン！あいつ等に不幸のメロディを聴かせてやれ！…」

「ネガトーン！」

ネガトーンは雄叫びをあげ、不幸のメロディを奏でた。しかし

「うわああ！んだよ！この下手クソな音楽は…！」

「ひどいね…」

春樹と勇一は全く悲しんだりしていなかつた。

「なに…………なぜ効かない！？」

「「わからない」」

髭の男は驚き、後ろにいた紫の天然のパーマと水色のロングヘアの男性がオペラを歌つているようなしゃべり方をしながら現れた。春樹は何が何だかわからなくなりメロディに言つた。

「おい！響！あいつ等は誰なんだよ！」

メロディは片方の耳を塞ぎながら春樹に言つた。

「あいつ等はトリオ・ザ・マイナーって言って、この世界に不幸のメロディを奏でて世界中に不幸に落とそうとしている悪い奴らなの

! !

「世界に不幸にさせん… 音楽を使ってなのかな？」

やうよ！あいつ等は音楽を使ひて、體を不幸にさせねばならぬ！」

ヒートの言葉を聞いたギハは心の底から怒りがわき上かり始めた。

「許さないね。

「許さないね。音楽は人を幸せにするものなのに、それを人を苦しむ道具にするなんて許さないね！」

「これは俺達の敵は一隻のガイヤ以外も現れただってことだな」「そうなるね。メロディ、リズム、ギート。」

ん?  
な?  
に?  
」

僕達は音楽を汚すあいつらを許さない!だから僕達は一緒に闘う。

「もちろん！正義の味方は助け合つ！でしょ？」

「なん! メロディの言ひ通り!」

10

（響はカツ一いい所見せねえとな!!）よーし行くぜ!!

先手を打つたのはキバだつた。

「いつけえ——！バツシャ——マグナム！！」

「ネガ――――――！」

「…………何やつてんだネガトーン！」

「人の事を言つてゐる暇があるなら自分も闇いなよ」

ダークキバがいた。

なに――お前にいつの間に――

「食らえ　アツバ1！」

「喰らえ！ダークネスヘルクラッシュ！」

ター・ケギハは高くジャンプし、エリオ・サ・マイカニにスエレー・パンチを3発放つた。

「「「ぐわああああ！」」

飛ばされた3人はそのまま氣絶した。

「こ」の程度かい？呆気ないね。さて、僕も手伝つか

「オラオラオラオラオラ！ドンドン行くぜ！」

キバはバツシャーマグナムで連射していた。「いっけえ！3人とも

！」

「プリキュア！トリプルハーモニーパンチ！」

3人はファンガイアナガトーンに強烈なパンチを放つた。

「さすが！やるじゃん！」

「こ」は一気に決めよう！」「

「「「OK！」」

「奏でましよう、奇跡のメロディー・ミラクルベルティエ！おいでミリー！」

「刻みましょう、大いなるリズム！ファンガステイックベルティエ！おいでファリー！」

「弾き鳴らせ、愛の魂！ラブギター・ロッヂ！おいで、ソリー！チエンジ、ソウルロッヂ！」

「バツシャーバイト！」

「ウエイクアップ2！」

「「「翔けめぐれ、トーンのリング！」」

「「「プリキュア・ミュージックロンド！」」

「プリキュア・ハートフルビー・トロック！」

「喰らえ！バツシャー・アクアトルネード！」

「これでチエックメイトだ！キングスバーストエンド！！！」

5人はそれぞれの必殺技でファンガイアナガトーンに放つた。ファンガイアナガトーンは爆破し、音符が現れた。キバはそれをキャッチすると音符は色が変わり、ピンク色の音符になった。

「あれ？色が変わった？」

それを見たメロディ達は驚いていた。

（あれ？音符を元に戻すにはハミィがないと出来ないと出来ないと…）

「あ、そう言えばあの3人は！！」

キバは3人を探すと3人はいつの間にか気絶から覚めていた。

「おのれハリヰニ万それとお前公!! 覚えとによ!!」

賞べど」

「あ!! 逃げられや!!

「エバーハーモニー。」

「だな。その時こそぶつ到す。

卷之三

「ねえ、響。この音符はどうすんだ？」

「ああ、それは

「ハミィで任せる」ヤ

「おお、じゃあ頼んだ……ぜ……」

春樹は声を聞こえた場所へ向かって見たら、春樹の前に居たのは

「阿波」描かれた

「何でいるんだーヤ? その音符頑戴ーヤ

猫が喋つた所を見た、2人は固まりしばらく見ていた。

——ん——な——！？ね、ね、ね、ね、ね、猫が喋った——

卷之三

「一の子は仏達の二反達の

「ハミィだニヤー・トガヒベリ

「なにがよろしくだよ！お前化け猫か！？」

春樹！それはひとしよ！」

かで猿が鳴るがんてこの地獄一撃しておいたい子

るところに他にも見ていた。そこには緑と黒の人物がそれを見てい

「あれが、キバか。そしてそいつと一緒にいるのは…プリキュアか

…「

『ねえ。青のプリキュアは君の友達じゃないの?』

「フン、俺はもうあいつとは仲間じゃないよ。あいつなんかどうでもいい」

『強情だね。本当はあの子を守りたいんじゃないの?』

「さあな。それよりもまず、あいつらを近づこい!』

『そうだね。それじゃあ、戻ろつ。』

「ああ…」

緑の黒の人物はしばらく春樹達を見て、どこかへ去った。

次回、仮面ライダーキバ!

「転校生?」

「転校生の美川フルテです。」

「僕は一年の高山カイト。まあ一応よろしく。それからさよなら」

「トリオ・ザ・マイナーの奴らファンガイアと組んだのかよー。」

「さあ、お前の罪を数えろ」

次回、転校生と謎の2色ライダー!  
ウェイクアップ!<sup>やだめ</sup>運命の鎖を解き放て!

## 第5話 ネガトーン現る！？そして最強のチームワーク！（後書き）

次回は2人で1人の仮面ライダーが登場です！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3112z/>

スイートプリキュア&仮面ライダーキバ&W 心の音楽とそれぞれの想いと覚悟

2012年1月10日22時49分発行